

## 生活リズムを整える ～Aさんの事例を通して～

山内弘美<sup>1)</sup> 片山めぐみ<sup>1)</sup> 宿野部ひとみ<sup>1)</sup>  
小館明美<sup>1)</sup> 田中美津子<sup>1)</sup> 清水奈津子<sup>1)</sup>  
山下有美<sup>1)</sup> 佐々木美和子<sup>1)</sup>

1) 障害者総合福祉センターなつどもり 障害者支援施設しらかば寮

Key Words ①危険回避 ②対人関係  
③チームワーク

### I. はじめに

しらかば寮は、知的障害者更生施設として、昭和53年に開設し、これまで利用者の自立と社会活動への参加促進をするため利用者の保護と必要な援助を行ってきた。

平成18年10月1日からは、障害者自立支援法における新体系の事業に移行し、現在、日中活動については生活介護事業80名、入所については80名を定員とする施設入所支援を行ってきた。こうした中、さらに生活の場の充実と支援の体系を確立していかなければならないものの、実際は職員配置数も含め、新体系移行後施設の運営は厳しくなっていく一方である。

今回の研究発表では、1人の障害の重い女性利用者に視点をあて、これまでの支援内容を振り返りながら、今後の支援のあり方を展望するとともに、支援する側の問題等も浮彫りにしながら、変化するニーズに添えていきたいと考え取り組んだ。

### II. 利用者のプロフィール等

Aさん

年齢	29歳
性別	女性
障害程度	愛護手帳A 障害程度区分6
ADL	着脱・排泄・入浴(全介助)、 食事(一部介助)
意思疎通	不可
服薬状況	精神安定剤・行動抑制剤服用

### III. 日常生活の状況及び行動面

#### 1. 日中の支援状況

洗面歯磨き・食事・排泄・入浴以外は、ほぼ居室(個室)で過ごしてもらうことが多い。精神的に安定している時には時間を作り、センター内の歩行を行ってきた。しかし、歩行時にホームに戻るよう促すと抵抗し、噛み付いたり、髪を引っ張ったり、座り込んでしまうこともあり、2人以上の職員で対応しなければならないことも多くあり継続的に実施できなかった。不安定になると、長い間泣き続けたり、頭部を叩く自傷行

為も見られた。

#### 2. 就寝状況

居室のベッド上で跳び跳ねたり、タンスに上がった、タンスの中の衣類をしゃぶったり、目に付いた物を口に入れたりなどするため、誤嚥防止のため小物類などは居室に置かないようにしている。

不眠時には断続的に居室の戸・壁・手を叩いたり、奇声を発するため他利用者の安眠妨害となっている。

#### 3. 行動面

不眠・失禁・自傷・多動・徘徊・興奮・粗暴・破壊行為・異食・盗食・衣類しゃぶり等がある。

### IV. 研究方法(ケースに対する支援展開)

支援する側からのアプローチに対し、以前より拒否的な抵抗等が少なくなっていることで、継続した支援を実施することとした。

1. 支援計画……「生活リズムを整える」

2. 支援内容……歩行(健康管理)、排泄に重点をおき支援する。

1) 午前のほぼ定時に1時間ほどの寮内外における歩行支援を行う。

マンツーマンで対応し、どうしても対応しきれない場合は他の職員の応援を頼む。

2) 定時に排泄誘導を行う。

特に夜間に目覚め、戸叩き等が見られたらすぐにトイレに誘導する。

3. 期間……平成20年6月～9月

### V. 経緯・結果

#### 1. 日中の状況

危険行為防止のための職員による対応はマンツーマンでも行えるようになってきた。排泄や歩行への誘導も素直に応じられるようになり、自傷行為も激減してきたため、複数の職員を要していた誘導支援が単一で行えるようになった。思い通りにならず、座り込む等の拒否的態度は今もって見られるが、以前ほどの強い抵抗感はなくなっている。

#### 2. 就寝状況

居室の戸を叩くことはあるが、水分補給を促すと、職員付き添いのもとで問題なく摂取し、ホーム内をうろつくこともなく自室に戻り布団に入る。就寝状態も良好である。

### VI. 考察

現在のしらかば寮において、1人の利用者に対し1人の職員が付きっきりで支援にあたることは現状からは極めて困難であるが、歩行支援のような限定的な時間帯を確保しながら支援を行うことは出来た。また、居室より外へ出る機会が増えたためか、排泄誘導への抵抗も少な

くなり、スムーズな定時排泄が可能となっている。

今後は、利用者の生活リズムにあった排泄時間を確定することにより、より一層失禁回数を減らしていけるものと思われる。

## VII. まとめ

行動制限は人権擁護の観点からだけでなく、QOLの面からみても問題があることは当然のことである。やむを得ず多くの時間を居室での生活を余儀なくされているわけであるが、利用者本人と支援する側との関わり、あるいは他の利用者などとの関わりを増やししながら、少しでも充実・安定した生活が送れるよう工夫して支援していきたい。その支援にあたり強く思うことは、人員配置基準の見直しと、支援する職員の根気とチーム力が絶対不可欠だということである。

## VIII. 文献

- 志賀利一 「障害児者の問題行動」 ～その理解と対応  
マニュアル  
エンパワメント研究所出版
- 高田博行 国立肥前療養所児童指導員室 「障害児の  
問題行動」 図書出版(有)二瓶社